

くらしの中で読む『正法眼蔵』

——面授の巻——

その十

成興寺住職 小倉玄照

〈本文〉

仏道の面授かくのごとくなる道理を、かつて見聞けんもんせず、参学なきともがらあるなかに、大宋国仁宗皇帝の御宇、景祐年中に、薦福寺せんぷくじの承古じやうこ禅師といふものあり。上堂じやうどうに云く、

「雲門匡真うんもんきやうしん大師、如今現在いま在せり、諸人還た見まる麼や。此この事、直すべからに須たしく諦たし当とうして始めて得べし、自ら謾まんずべからず。且しばらく往古おうこに黄檗おうはくの、百丈和尚ばくざいしやうの馬大師下喝ばだいしあかつの因縁いんげんを拏なするを聞き、他かの因ちんみに大省ちやうせるが如ごとし。百丈問ひふ、子向なんじやう

後ご、大師だいしに嗣すすること莫なしや否いなや。黄檗おうはく云く、某それ、大師だいしを識しると雖いえども、要且いとすらくは大師だいしを見みず。もし大師だいしに承嗣じやうすせば、恐おそらくは我が児孫こゝろを喪なせん。大衆だいしゆ、当時その馬大師ばだいし遷化せんかして、未まだ五年ごねんを得えざるに、黄檗おうはく自ら言いふ、見みずと。当まに知るべし、黄檗おうはくの見処みどころ円まならず、要且いとすらくは祇ただだ一隻眼いっしやくを具たするのみ。山僧さんぞうは即すなはち然しからず、雲門大師うんもんだいしを識し得えし、亦またた雲門大師うんもんだいしを見み得えし、方まさに雲門大師うんもんだいしに承嗣じやうすすべし。祇ただだ雲門うんもんの如ごときは、入滅すてして已すでに一百余年ひゃくねんを得えたり。

如今作麼生か箇の親見底の道理を説かん、会す麼。通人達士は、方に証明すべし。眇劣の徒は、心に疑謗を生ず。見得は之を言ふこと
在らず、未見の者、如今看取すや不や。請ふらくは久立珍重。」

いまなんぢ雲門大師をしり、雲門大師をみることをたとひゆるすとも、雲門大師まのあたりなんぢをみるやいまだしや。雲門大師なんぢをみずんば、なんぢ承嗣雲門大師不得ならん。雲門大師いまだなんぢをゆるさざるがゆゑに、なんぢもまた雲門大師われをみるといはず。しりぬ、なんぢ雲門大師といまだ相見せざりといふことを。

七仏諸仏の過去・現在・未来に、いづれの仏祖か師資相見せざるに嗣法せる。なんぢ黄檗を見処不円といふことなかれ。なんぢいかでか黄檗の行履をはからん、黄檗の言句をはからん。黄檗は古仏なり、嗣法に究参なり。なんぢは嗣法

の道理かつて夢也未見聞参学在なり。黄檗は師に嗣法せり、祖を保任せり。黄檗は師にまみえ、師をみる。なんぢはすべて師をみず、祖をしらず。自己をしらず、自己をみず。なんぢをみる師なし、なんぢ師眼いまだ参開せず。真箇なんぢ見処不円なり、嗣法未円なり。

なんぢしるやいなや、雲門大師はこれ黄檗の法孫なることを。なんぢいかでか百丈・黄檗の道処を測量せん。雲門大師の道処、なんぢなほ測量すべからず。百丈・黄檗の道処は、参学のちからあるもの、これを拈挙するなり。直指の落処あるもの、測量すべし。なんぢは参学なし、落処なし。しるべからず、はかるべからざるなり。馬大師遷化、未得五年なるに、馬大師に嗣法せずといふ、まことにわらふにもたらず。たとひ嗣法すべくは、無量効のちなりとも嗣法すべし。嗣法すべからざらんば、半日なりとも須臾なりとも、嗣法すべからず。なんぢすべて

仏道の日面月面をみざる暗者愚蒙なり。

〈現代語私訳〉

仏道における面授のありようは以上のような道理であるのに、そのことをかたつて見聞したこともなく、また身心を打ち込んで学んだこともない輩があつて、その一人に、大宋国は仁宗皇帝の時代、景祐年間に、薦福寺の承古禪師という者がいた。ある時、法堂での公式説法で述べた記録が残っている。

「雲門の匡真大師（九四九寂、生年不詳）

は、いまもここに在します。はたしてみなさん、見ることができるかどうか。もし眼前に彷彿とすることが出来るなら、私と同じ境界である。どうだ、見えるか、見えるか。このことがすつとほぞおちしてこそまっとうな修行だ。ただし、自分をごまかしてはならぬぞ。

とりあえずこれは、むかし黄檗が、その師

百丈和尚が馬祖道一の弟子（百丈）に対する叱声「喝」を發するいきさつを語るのを聞いて、大いに反省し得るところがあつたという故事を彷彿させる。

百丈が（黄檗に）問うた。《そなたは、馬祖大師の法を嗣ぐ気があるかどうか》と。

黄檗は答えた。《私は、馬祖大師を承知してはいます。しかし、お目にかかったわけではありません。もし私が大師の法を嗣ぐようになれば、（面授せず）に法を嗣ぐことになつて）おそらく私の法を嗣ぐ兒孫は絶えるに違ひありません》

修行者たちよ、その当時、馬祖大師がなくなつて五年も経つていなかった。それなのに黄檗はみずから、会つていない、という。このことからほつきりするではないか。黄檗の見るところは少々欠けたところがある。言うなれば、片目しか開いていないのである。

その点、私は違う。雲門大師をよく承知しているし、雲門大師にお会いしたのであり、また雲門大師の真髓を会得し法を嗣いだのである。ただ雲門大師は、入滅してすでに百年余り経つ。それを今にしてどうして親しくお会いしたと言えるのか。おわかりか。この道理を心得た者は、その点を明らかにすることが出来るであろう。目のかすんでいる輩は、心に疑惑を生じてしまう。だからとても雲門大師に会うことは出来ない。まだ見ていない者はどうだ、今、会えるかどうか。

長時間にわたり、立っけてもらって、御苦勞であった。」

今、なんじ（承古）が雲門を知り、雲門大師をまのあたり見たという話が本当だと信じることにしても、はたして雲門大師の方は親しくなんじを見たのかどうか。雲門大師がなんじを見ていないなら、なんじはあれこれ言ってみても

雲門大師の法を嗣ぐ弟子にはとてもなれない。雲門大師は、まだなんじを許していないのだから、なんじもまた雲門大師は自分を親しく見たとはとても言えない。それではつきりする。なんじは雲門大師とまだ目見えてはいないのである。

（永遠の過去から釈迦牟尼仏に至るまで、仏のいのちを伝えて来た）七仏をはじめとして、過去、現在、未来にわたるあらゆる仏祖の中で師と弟子が相見えることなくその法を伝えたという例外はあるまい。なんじは、黄檗に関して「見るところが完全ではなかった」という評価をすべきではない。なんじに、どうして黄檗の生きざまを云々できようか。黄檗の言句の真意がわかるるか。黄檗は古仏として尊ばれる存在だから、嗣法のこととはよくよく承知だ。ところが、なんじは、嗣法の道理を夢にも見たこともあるまいし、実際に修行の場で学んだことも

あるまい。黄檗は、その師の法をきちんと嗣ぎ、祖師としての地位を保っておられる。黄檗は、その師に直接まみえ、その師を親しく見たのである。なんじはいっさい師を見ておらず、祖を知らないのである。自己を知らないであり、自己を見てもいない。なんじを見る師はないし、なんじが師を見る眼も開かれてはいない。まさしくなんじの見るところは完全ではないし、嗣法も充全ではない。

なんじは知っているかどうか、雲門大師はまっとうな黄檗の法孫だということを。なんじは、どうして百丈や黄檗のいうところを思いはかることが出来ようぞ。雲門大師がいうところをなんじはやはり思いはかつてはならぬのだ。百丈や黄檗のいうところは、正しく師に就いて修行力を身につけた者がこれを語ることが出来るのだ。修行の勘どころを端的に示し得る者にしてはじめて云々することが出来るのだ。なんじは

正しい師について修行していないし、勘どころをほぞおちさせていない。しることも出来ないし、想像すら思いもよらぬことだ。(黄檗が)その師である馬大師が亡くなって五年足らずであるのに、馬大師の法を嗣いでいないという。これは、まことに笑い話にもならない。もし直接の出会いがなくて嗣法が出来るのなら、無限の過去の祖師の法を嗣ぐことが可能である。直接の出会いのない師の法を嗣ぐことは不可能だとすれば、半日とか、ほんの瞬間とかのすれ違いでも嗣法は出来ない。なんじは、仏道の何たるかをまったく知らないあんぽんたんであり、たわけ者である。

いのちは観念ではない

面授の巻の示衆は、寛元元年(一二四三)十月二十日。ところが、それから間もなく、追補

ないしは補遺に相当する部分が書き加えられた
 ようです。

「面授」の巻の冒頭で、インドの靈鷲山りょうじゆせんの集
 会で、優曇華うとうげを手にして微笑された時、摩訶迦
 葉尊者が破顔微笑、釈尊がすかさず「われに正
 法眼蔵涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付属す」と宣
 言された故事が語られています。実は、この故
 事が「面授」の巻の主題です。

「正法眼蔵」と言い、「涅槃妙心」と言い、或
 いは二句を連結して「正法眼蔵涅槃妙心」と言っ
 ても殆ど同じことを表現しています。釈尊の仏
 法の真髓のことです。仏道の眼目と言ってもよ
 いでしょう。もちろん目に見えるかたちはあり
 ません。言ってみれば、とらえどころがないも
 のです。そういう意味では、涅槃妙心という表
 現は、その本質をついていると言ってよいでしょ
 う。私たちはうっかりすると、「心」の中にそれ
 を認めたくなくなるようなイメージを抱きます。つ

まり、仏のいのちを観念的にとらえてしまいが
 ちなのです。

しかし「心」とは異質なのです。それゆえに
 私たちの感覚がとらえる「心」とは区別して「妙
 心」と言います。からだ全体に「蔵おぼろめ」られたも
 のと言った方がよいかもありません。

それにしても、目には見えませんから、語録
 を読んだり、口承によるエピソードなどを伝え
 聞いて、古人の人となりを知り、それと自分の
 心境を重ねあわせてその「心」を類推すること
 は出来ます。それによって、修行体験で得た自
 分の心境がその古人とまったく同じだと錯覚す
 ることもあり得ます。

ここで取りあげられている承古禪師のエピソー
 ドは、まさにそのような間違いを犯しているわ
 けです。直接に面かほと面とを合わせてこそ面授で
 あり、嗣法（仏のいのちを伝えること）なのだ
 ということを特に念を押ししておくためには、恰

好の具体例だと考えられたのです。

電子情報の危険性

ちなみに、雲門文偃ぶんえんは、雪峰義存ぎそん（八二二―九〇九）の法を嗣いだ弟子で、雲門山に三十余年住して弟子を鍛えたと言われています。いわゆる雲門宗は、南宋以後は衰微しますが宋代には臨済宗と並んで栄えたと言われています。

それぞれの生歿年をみればおわかりのように、雲門大師が歿して百年以上経って、承古は生まれています。直接に顔を合わせることは不可能です。面授面受は成立しません。それなのに「自分は雲門の直弟子だ」と言うのは、例えば私が道元禅師の語録とか著作とかを読んで深い感銘を受け、悟りを開いたような気分になったから「自分は道元大和尚の嗣法の弟子だ」と広言するようなものです。

面授面受というのは、一種の双方行為です。自分の判断で、あの人のすべての生き方がよく理解でき、その教えの通りに生きていくことが出来る、と弟子が一方的に宣言するだけではダメなのです。師の方が弟子の眼を視ながら「お前は、まだ不充分なところもあるが、まあ、この調子でやって行けば何とかなる」と弟子の生き方を認めてこそ面授面受が成立するのです。嗣法というのは、そういうものなのです。

現代の問題でこのことを考えてみます。このごろコンピューターが全盛で公私を問わず国中の人々がインターネットで情報を交換しています。或いは、携帯電話やEメールでの交流が日常的になっています。

しかしこのような機器を介しての情報の交換では嗣法は不可能です。直接に眼を視、面かおを見していないのだから当然の話です。たとえ、現在生きている人であっても、ケイタイやメールで

教えを乞うだけでは、自我肥代の度を増すだけです。メール上の文字を追いながら、自分に納得した考えだけを受け入れ、気に入らぬ考えは無意識のうちに（或いは意識的に）無視してしまうのですから当然そうなります。面授面受はおよそ不可能な話です。

このごろ布教教化の手段としてインターネットのホームページを立ち上げたり、メールを積極的に活用する青年僧たちが多勢います。しかし、電子機器を利用して仏法を説くことは邪道ではないかという懸念を抱きます。

特にインターネットの双方向性の機能がくせものです。画面上に質問等を入力すれば、即座に（或いは、時を置いて）その画面上に出現するという擬似臨場性が問題だと思えます。画面上で応答をくり返しながら「雲門大師を識得し、また雲門大師を見得し、まさに雲門大師に承嗣した」と同質の気分が陥ってしまうのです。

それは、面授を重視する立場からは徹底否定されるべきです。インターネットのやりとりでは、「なんぢはすべて師をみず、祖をしらず」というそしりを免れないのです。さらには、つまるところ「自己をしらず、自己をみず」ということになってしまうのです。

私は、インターネット文化の進展に、人間の危機を感じています。バーチャル・リアリティ（仮想現実）の問題を含めて、面授面受を忌避する傾向のある現代社会に大いなる警告を発しているのが「面授」の巻なのです。